第１回　物語が始まる季節

速いものは、わたしたちを高揚させ、日頃の悩みや不安を忘れさせる。
たとえば、ダウンヒルを滑るスキーヤーは、ただひたすら美しく、「物語性」は自然に排除させる。
つまり、わたしたちはスピードに魅せられ、スキーヤーの生い立ちや家族関係や人間性への興味をいつの間にか忘れるのだ。

物語について、友人の脚本家は、ある人間が穴に落ちて這い上がる話と、穴に落ちてそのまま死ぬ話、大きく分けてその二つしかないのだと言った。いずれにしろ、物語というのは、たとえラストがハッピーエンドであっても、悩みや不安や苦難がなければはじまらないのである。
わたしたちは、自らの「物語」が楽しさや喜びなかりでないことを知っている。だから一瞬でも「物語」を忘れさせてくる「速さ」に美しさを感じ、高揚を得るのだ。

4 月、学校や職場で、大勢の人の新しい物語がはじまる。今、単純に希望を抱くのも簡単でないし、希望を持ち続けるのはもっとむずかしい。誰もが人間関係に悩み、将来への不安を覚える。はじまった物語に、誇りと自信を織り込んでいくことがどれほど大変か、何度となく実感することだろう。

ちょうど 40 年ほど前、第一次オイルショック前夜で、高度成長に陰りが見えはじめたころ、競馬界にハイセイコーというスーパースターが生まれた。ハイセイコーは、地方でデビューし、連勝を重ねて中央競馬に移籍する。決してエリートではない馬が懸命に走り、勝ち続けることに、多くの日本人が熱狂し、喝采を送った。ハイセイコーは、速さに物語性が重なる稀有な例で、1973 年の皐月賞を制したとき、その名声は競馬ファンだけではなく、国民的なものとなった。

自らの物語に不安や悩みを覚えるとき、わたしはふと、あの雨の中山競馬場のハイセイコーの走りを思い出すことがある。
　村上龍（東スポより引用）

第２回　桜散りゆくころ

私たち日本人が桜を好むのは、一斉に咲き、「潔く散る」からだと言われている。だが、違う見方もあるのではないか。わたしには桜はとても気まぐれに映る。派手に開花しすぐに「このくらいでいいでしょう？」という感じで、あっさりとあっという間に散ってしまう、なんて気まぐれな花だろうと思ってしまうのだ。

サッカーの中田英寿がイタリアに渡り、ウンブリア州の州都を本拠地とするチームに入団したとき、同僚に一人のクロアチア人選手がいた。非凡な突破力を持ち、左サイドを駆け上がって強いシュートを放つ、玄人好みの選手だった。しかし、バルカンの血が濃いせいか、好不調の波が激しかった。よく走って決勝点を奪う試合があるかと思えば、ほとんど動こうとしない日もあった。

どうしてそんなに気まぐれなのか、と聞いたことがある。
すると彼は答えた。
「目覚めたら、まったくやる気が起きない、誰にでもそんな朝があるはずだ、そんなときに、頑張るやつの方がおかしい」
きまじめな国民性において、気まぐれは、あんまり褒められない。
だが、必死になる瞬間を自ら選び、このゲームだけは絶対に負けられないという日に備えているという言い方もできる。

1970 年代半ば、エリモジョージという個性的な馬がいた。
1 番人気に押されると惨敗し、人気が下がると勝ってみせる、ファンは「気まぐれジョージ」と呼んでいた。75 年夏、悲劇が起こる。放牧されていた牧場が大火災に遭ったのだ。多くの馬が失われた。生き残ったのはエリモジョージ他、ほんの数頭だったらしい。

だが、翌 76 年春の天皇賞、１７頭中１２番人気だったエリモジョージは、不良馬場の中、見事逃げ切って、勝利する。おそらく「気まぐれジョージ」は、このレースだけは絶対に負けられないと思っていたんだ。
不慮の火災に遭った仲間の馬のために、また仲間たちから力を得て、走ったのだと思う。「気まぐれジョージ」の勇姿は、桜が散りゆくころの鮮烈な記憶として、わたしの脳裏に刻まれている。

第3回　愛に充ちた孤高

1980年代後半、伝統のカーレースを取材していて、わたしは何度か素朴な疑問を持った。
「これほどまでに速く走る車を、なぜわたしたちは必要とするのだろう」
最高の仕様を誇るレーシングマシンは、その姿形も、疾走する様も、ため息が出るほど美しい。
またパイロットと呼ばれるレーサーたちの、スピードに対する強烈なモチベーションも特筆すべきものだ。
ある年、フランス南部のサーキットで行われたレースでのことだ。
雰囲気を盛り上げるために、フランス空軍最新鋭の戦闘機が数機、飛来したことがあった。
すべてのレーサーが、まるで少年のような表情で、ジェット戦闘機の飛行の様子を微笑ましく思ったものだ。
レーシングマシンのエンジン音は、非常に印象的だ。
レースの朝、サーキットに近づいていくと、メカニックによって調整されているエンジン音が彼方から響いてくる。
わたしは、その音に、孤独を感じることがあった。
サーキットを走るためだけに作られた、孤高のマシンであり、しかも、メカたちの、愛情に充ちた入念な調整を必要とする。
70年代、テイタニヤという、牝のサラブレッドがいた。
テイタニヤは、母馬に育児を拒否されたため、人間の手によって、粉ミルクで育てられた。
仔馬は、母乳が与えられないと免疫力が弱く、病気になりやすい。
また、テイタニヤは、他の仔馬と違って放牧中群れることができず、人間が遊び相手で、集団での自然な疾走訓練ができなかった。
だが、競走馬としてデビューすると、周囲の不安をよそに勝ち続け、76年5月、ついにオークスの舞台に立つ。
血統的に不可能とされる、オークス2400メートルの壁。
テイタニヤは、序盤は中団に位置し、しだいに前方に進出して、最終コーナーを4番手で通過すると、まるで、これまで受けてきた人間の愛情に報いようとするかのように、懸命に走り、先頭でゴール板を駆け抜けた。
美しい孤高は、周囲の豊かな愛情に支えられて、はじめてその姿を現す。

第 4 回　奇跡の対話

80 年代末、フィンランドでラリーの取材をしたことがある。
地元出身で、当時の最高のドライバーにインタビューし、そのあとのテスト走行で、幸運にも助手席に同乗させてもらうことになった。
そのときの体験は忘れようがない。
ぬかるんだ山道を猛スピードで疾走するのだが、コーナーにさしかかると、ステアリングで曲がるのではなく、ブレーキとアクセス操作で車体を滑らせる。
ほとんど速度は落ちない。
コーナーを「曲がる」のではなく「抜ける」のである。
どんなジェットコースターよりもスリリングで、どうやったらあんなことができるのですかと聞くと、印象に残る言葉が返ってきた。
「大事なのは、マシンと対話することだ。マシンの声を聞くんだよ」
車と人間が対話できるわけがない。
だがきっと何かを介して、通じ合うものがあるのだろう、そう思った。
対話ということで思い出すのは、1984 年の日本ダービーだ。
伝説の名馬シンボリルドルフ、騎手は岡部幸雄だった。
すでに名を成していた岡部だが、日本ダービーに勝てず、もがき苦しんでいた。
そして、ルドルフと出会ったのだ。
まれに見るパワーを秘めたルドルフは、デビュー戦で岡部とともに圧倒的勝利を得ると、その後も連戦連勝を重ね、無敗で皐月賞を制した。
そして、日本ダービーを迎える。
ルドルフはもちろん 1 番人気で、岡部は、想像を絶するような重圧を背負って夢の舞台に挑んだ。
レースは逃げ馬がスムーズに先行し、「追いつけないかも知れない」と岡部は、向こう正面で早めのスパートをかけた。
だが、ルドルフは反応しない。
観客からどよめきが洩れ、岡部は焦った。
そのとき、奇跡のようなことが起こった。
岡部に、ルドルフの声が聞こえたというのだ。
「岡部君、まだ早い」
やがて直線に入ると、ルドルフは自らハミをとり、驚異のスパートをかけ、先行馬を差しきって、勝った。
「皇帝」と呼ばれる名馬誕生の瞬間であり、「名手」と謳われる超一流騎手誕生の瞬間でもあった。
ルドルフは、本当に岡部と対話したのだろうか。
わたしは、奇跡の対話は実在したと思う。
極度に集中した人間は、マシンとも対話するのだ。
歴史に残る名馬の声が聞こえないわけがない。
http://www.youtube.com/watch?v=6020lfYUbKs

第 5 回　闇の中の光

かつて、ニューヨーク～パリを 3 時間で飛ぶ超音速ジェット旅客機があった。
ジェット機というよりは「横になったロケット」のような独特の形をしていて、とにかく速かった。
最初に乗ったのは、1990 年、サッカーのイタリア・ワールドカップのときだ。
昼過ぎにニューヨークを出発し、夜遅くにパリに着き、数時間の仮眠をとって翌朝の最初の便でローマに飛んだが、要したのはたった 10 時間だった。
そのフライトがあまりに刺激的だったので、その後わたしは機会があるごとに超音速機に乗ることになる。
夏至のころの飛行が、とくに素晴らしかった。
1 万メートルをはるかに越える飛行高度で、窓外は眩しいほど明るい。
シャンパンを数杯飲み、うとうとしているうちに、もう降下のアナウンスが流れる。
雲の切れ間から、地球の輪郭が浮かび上がる。
半分は昼で、半分はすでに薄暗い。
超音速機は、暗い部分に向かって突っ込んでいく。
夜になるのではなく、夜に入りこんでいくという不思議な感覚を味わう。
そして、あっという間に、無数の明かりがきらめくパリの夜が現れる。
わたしは、「闇が光を際立たせる」という有名な画家の言葉を体感した。
人生にも闇と光がある。
暗い道を歩き続けた人は、一条の光も見逃すことはない。
90 年代初頭、メジロパーマーという個性的な馬がいた。
名門牧場で生まれながら、デビュー後に 2 度の骨折、長期休養を余儀なくされ、「周囲を驚かす大逃げで敗退」というレースが続き、4 歳の春になっても満足な活躍はできなかった。
やがて下位のクラスへの降格、そしてさらに障害レースへと転向する。
だが飛越が苦手なため、適正なしと判断されてしまった。
5 歳になり、もうあとがないという最後のチャンスの年、大逃げで敗退を繰り返しながらも、3 戦目で 2 度目の重賞制覇を成し遂げ、何とか宝塚記念の出走権を得た。
9 番人気という低い評価だった。
だが、メジロパーマーは、まるで暗い道のりの中で確かな光を見出だしたかのように、無謀に見えるハイペースで先行し、最後の直線でもそのスピードを維持し、3 馬身差という圧勝で、G1 初制覇を果たした。
暗い道のりばかり続くと嘆くな、闇の中にこそ光がある、1992 年宝塚記念のメジロパーマーの驚異的な走りは、そんな言葉を想起させる。
http://www.youtube.com/watch?v=iHHVJFDZqbo&feature=kp

第 6 回　開花する才能

才能とは何だろうとよく考える。
成功と縁のない人間は、「あの人は才能があったから」と、自らを慰める。
だが才能の本質は、「努力を継続できる力」である。
友人の画家は、1 日平均して十二時間、絵を描き続ける。
決してスケッチブックを離さない。
彼女と会うとき、他の人はとてもこれだけの時間、絵を描き続けることはできないと思う。
いつでも、いつまでも絵を描き続けることができる、それが才能であり、その気の遠くなるような時間が人の心を動かす作品として結晶する。

1990 年代後半、セイウンスカイという印象的な馬がファンを魅了した。
地味な血統であり、仔馬時代は馬体のバランスが悪く、なかなか引き取り手が見つからなかったという。
だが、免許を取得したばかりの若手の調教師が引き取ることになって、劇的なドラマが幕を開ける。
セイウンスカイは、才能を育んでいった。
1998 年、初戦 2 戦に勝ち、クラシック候補に上り詰め、同年の皐月賞を制し、そして、伝統となる菊花賞を迎える。
菊花賞の距離は 3000 メートル、スピードとスタミナ、そして精密なペース配分が要求される。
セイウンスカイは、スタートからハナに立ち、前半の 1000 メートルを 59.6 秒という暴走のようなハイペースで走り、中間の 1000 メートルで 64.3 秒と一気に緩めて後続を引きつけ、最後の 1000 メートルを 59.3 で駆け抜けて、勝利した。
3000 メートルという距離を逃げ切るのは 38 年ぶりの偉業で、また優勝タイムは、当時の 3000 メートルの世界記録だった。

ゴール前の直線、背後からライバルたちが迫ろうとしたが、セイウンスカイのスピードは落ちなかった。
逃げ切るというより、「他を寄せつけない」驚異的な走りだった。
まったく期待されていなかった地味な血統馬が、歴史を作った。
だがわたしは、セイウンスカイは、誰も窺い知れない努力を、継続したのだと思う。
1998 年、菊花賞のラスト 1000 メートル、セイウンスカイの走りは優美であり、力強かった。
長い年月を経て形づくられる、美しい結晶のようだった。
http://www.youtube.com/watch?v=Qqk61IClYQQ

第７回　最後に、勝つ

早熟と大器晩成、どちらかを選べと言われたら、人はどう答えるのだろうか。
人生は長いのだから焦る必要はないという人は、よく画家のポール・ゴーギャンの例を挙げたりする。
タヒチに渡ったゴーギャンは代表作となる数々の名画を描きはじめるのだが、すでに四十歳を過ぎていた。
逆に、早熟の才能にこそ価値があると思う人は、アマデウス・モーツァルトの名前を出すだろう。
モーツァルトは五歳でピアノ曲を作曲した。
経営者の成功も多様だ。
ＩＴの分野では二十代で巨額の利益を手にする経営者も少なくない。
逆に、今や誰も知らない人はいない、ある有名なフライドチキンチェーンの創始者がフランチャイズビジネスを本格的に開始したのは六十歳を過ぎてからで、大成功を収めたとき、彼はすでに七十歳を優に越えていた。
結局、早熟か大器晩成かという二者択一にはあまり意味がないのかも知れない。
より重要なのは、「生涯を輝かせる勝利をつかむ」ということではないだろうか。
そのような勝利について思いを馳せるとき、カンパニーという馬が脳裏に浮かぶ。
三歳の一月、デビュー戦で勝利を収め、オープンクラスに駆け上がった。
だが、そのあとが長かった。
例年、重賞に一、二度勝ち、ＧＩでは好走するものの優勝には届かない。
そんな日々が続き、いつの間にか、八歳という年齢になっていた。
競走馬のピークは四、五歳だと言われている。
八歳、人間で言えば中年であり、サッカー選手に例えると四十歳を越えたミッドフィルダーといったところだろう。
だが、2009 年、八歳の秋、カンパニーは奇跡を起こす。
当時の人気馬ウオッカを差しきって毎日王冠を制すると、天皇賞(秋)に挑戦する。
当然一番人気は前年の覇者で武豊が乗るウオッカ、カンパニーは五番人気だった。
だが、カンパニーは、まるで、長い長い年月の走りを集約させ一気に解き放つような、そんなレースを展開する。
スタートから淡々と中団後方の定位置を確保し、直線に入って自慢の末脚で先行馬をとらえ、残り 200 メートルで先頭に立つと、ウオッカらの追撃を悠々振り切って、勝利した。
「カンパニーです！カンパニー！八歳にしてはじめてのＧＩ制覇！」
アナウンサーの実況が今も耳に残る。
カンパニーは、最後に勝った。
そしてもちろん、「輝ける一生」を手中にしたのである。
http://www.youtube.com/watch?v=9McBSbvb1M8

第８回　強さと優しさ

強い、というのは、不思議な形容詞だ。
子どもでも意味がわかるが、そのニュアンスには無限の奥行きがあるように思える。
たとえば「強い人」というのは、具体的にどんな人物なのだろうか。
ケンカに強い、議論に強い、病気に強い、苦難に強い、それぞれ、腕力、弁舌、壮健、忍耐力など、強さを支えるものが違う。
もっとも重要な「強さ」というのは、生き延びるための力、ではないかと思う。
第二次世界大戦中、過酷な状況を生き延びたある医師が、象徴的なことを言っている。
「生き延びたのは、どちらかと言えば、強健な肉体を持った人ではなく、どんな過酷な状況にあっても、他人への優しさを失わない人だった」
強くなければ生きていけない、優しくなければ生きるに値しない、という有名な台詞があるが、強さと優しさは、分かちがたく影響し合う。
優れた競走馬は、「速い」ではなく、「強い」と評される。
勝ち方が劇的であればあるほど、ロマンが生まれ、伝説を作っていく。
日本近代競馬史上、どの馬が最強か、ファンはさまざまな思い入れがあるだろうが、デイープインパクトという名に異議を唱える人はいないのではないだろうか。
デイープインパクトは強かった。
とにかく、本当に、強かった。
デビューの新馬戦、第二戦の若駒Ｓから、無敗の三冠達成、単なる「勝ち」ではなく、「これはいったい何だ？」という異次元の走りだった。
今思い出しても鳥肌が立つ。
最後尾に近い位置から、最後の直線で抜け出し、ゴール前で他を置き去りにしてしまう。
騎手の武豊は、「まるで飛んでいるようだった」そう表現した。
だが、デイープインパクトは、馬体もそれほど大きくなかった。
また、素直でおとなしく、周囲の人たちに、とても優しかったらしい。
だから、日本中の期待を背負って挑んだフランスの凱旋門賞で敗れたとき、心に期するものがあったのだと思う。
そうやって臨んだのが、2006 年のジャパンカップだった。
絶対に負けられないレースで、デイープインパクトは、彼にしかできない「飛ぶような走り」を披露し、圧勝した。
人々は興奮し、そして癒された。
希望は失われなかった。
期待してくれる人の希望を消さないという意思と力、それが「強さ」の本質なのだと、デイープインパクトは、わたしたちに示したのだ。

特別編　キズナ、孤高の勝利

2013 年、5 月 26 日、ダービーにふさわしい快晴で、観客はさわやかな初夏の陽光を浴び、場内は、独特の雰囲気に包まれていた。
奇跡のような物語をこれから目の当たりにするという、静かで、深い、高揚感だ。
「ダービーは芥川賞ににている」
そう言ったのは先輩作家の古井由吉氏である。
芥川賞は、意味合いとしては「新人賞」だが、応募するものではなく、前期に発表された数百、数千の作品から、わずか数作の候補作が選ばれ、受賞作が決まる。
ダービーも、前年以降デビューした約七千頭近い三歳馬のうち、出走できるのは、たったの十八頭で、一生に一度しかチャンスがない。
「競馬の祭典」とも呼ばれる夢の舞台なのだ。
わたしが注目したのは、もちろんキズナだった。
震災後の人々の思いをこめて名付けられ、騎手・武豊の、5 度目のダービー制覇もかかっていた。
ライバルは、皐月賞 1 着のロゴタイプ、2 着のエピファネイア、3 着のコディーノ。
キズナは、あえて皐月賞には出ていない。
私はキズナの単勝で勝負することにした。
いつも同じだ。
姿と佇まいをみて、もっとも強烈な印象をもった馬に賭ける。
キズナには、他を寄せつけない強靭なオーラがあった。
あの馬が勝つ、わたしはそう思った。
それは予感とか予測ではなく、陶酔を伴った確信のようなものだった。
キズナは、前につけたロゴタイプと、中団のエピファネイアに見ながら進み、わたしが見ているすぐ前、最後の直線で、外に出た。
残り 400 メートル。
ロゴタイプが直線半ばでエピファネイアに抜かれる。
キズナは、いちばん外を、まっすぐに加速していった。
まるでキズナだけに用意されたコースがあるかのようだった。
だがエピファネイアも走りが緩まない。
残りはわずかに 10 メートル、確信は外れたかなと思ったとき、キズナは、弾かれたように伸び、差し切った。
まるで、夢の中にいるような気がした。
集団の外を、まっすぐに疾走するキズナは、美しかった。
孤高の勝利、そう思った。